



石川県立羽咋高等学校 関東同窓会会報



周年記念 第14号

令和元年 6月



平成30年度 総会・懇親会

六十周年を「一期」として……

関東同窓会会長 本多 群司



羽咋・中央(高16)

我々の「関東同窓会」は、今年11月に60周年を迎える。前校長前田氏が「教育現場は40年に一度の大きな変革期を迎えようとしている」と述べられたように皆様も「世の中、何か少々変な動きになってきたなあ」と見聞されているのではないだろうか。

18歳からの「参政権」また教育現場などの改革もあり、教育関係の方々はもちろんの事「学校・PTA・地域」の方々も一生懸命取り組んでいることと思いが、このような「時」こそ、同窓の方々



「羽咋(喰)の三犬」

の客観した目線が必要で、その中で我々(国民)自身が考えなければならぬ事柄に直結している問題も多々ある様です。

母校の「90周年記

念」の時、「羽咋(喰)の三犬」(羽咋の謂れ油・100号)を寄贈しました。羽咋を表現したものがない事とギリシャ哲学の「真(科学)・善(哲学・思想)・美(芸術美術)」を「三匹の犬(白・黒・斑)」に托した作品です。分析・統計など数値的なもの、また知識などはすべて解答を出すテクノロジ(コンピュータ)社会は、近代主義の最終期の様子で、人類の未踏の世界に突入しているようですが、それはあくまでも手段である。手段が目的となっているようだ。

もともと日本は、手段が目的の国と言えるが、「人間性」「生命」「生きる事」などの目的として、どのジャンルにおいても、特に「教育」において、今一度「真・善・美」(三位一体)の再考の必要があるのではないだろうか。正解はないかもしれないが、それらをサポートする「同窓力」の役目としての「目的提案」を、考える必要があると思われまふ。節目となるこの「60周年」を機に、それらを考える事も「同窓の意義」と思えるのですが……。

若き同窓の方々も少々ですが、増えてきました。今年もまた集まりましょう。そして「人生謳歌」の同窓会に!

設立六十周年に当たって

関東同窓会名誉会長 倉部 行雄



羽咋・島出(中18)

この度、石川県立羽咋高等学校 関東同窓会設立60周年に当たり、所感の一端を述べたいと思います。

誰しも、その人生にとって、60歳という還暦が重視されていますように、昭和34年に設立された同窓会にとっても設立60周年の意義には深いものがあります。

当初は、少数の有志からスタートしましたが、年々その努力によって、会員数も急速に増えました。これによって、同窓会での会員同士の交流などの事業も、「ふるさと」への思いや関心も、一層広まり深まっています。あの食べ物美味しかった。あの風景が懐かしい。あの人たちはどうしておられるのかなど、語り合えば限りがないほどです。ふるさとというものは、

そんなもの、そんな存在なのです。それに支えられ、それを支えているのが同窓会なのです。その同窓会が60周年を迎えるわけですから、嬉しく素晴らしいことではありませんか。

ところで、「数」とは「物知り辞典」(岩崎重郎ほか編)という本に、60についてこんな話が載っていたので、要約して紹介しましょう。

「悪妻は六十年の不作」……つまらない女を女房にすると一生苦労する

「手六十」……手習いは六十才まで上達の望みがある

「六十のむしろ破り」……六十歳の老人になってから女狂いを始める

「ばやり事は六十日」……流行は一時的なもので、しばらくすれば忘れられてしまう。